

陸軍特別幹部候補生制度の発足と、 航空兵として参加した者の記録

東京都 青木 誠

戦争は、何処の国も敗戦が濃くなると、その国の青少年を煽り、戦争に参加させ、犠牲者をだし、戦争が終結しても我らの青春が犠牲にされたことは当然とされている。

もっとも、我が国は、幕末の白虎隊の切腹ではないが相当死を美化する傾向がある。

明治時代は、日清・日露戦争に、大正時代は第一次世界大戦に巻き込まれた。しかし、青少年の戦争への駆り出しは無かった。昭和の初期は、町のあちこちで出征兵士は「我が大君に召されたる……」「歓呼の声に送られて……」の歌を国防婦人会に歌われて、故郷を後に大部分が中国へ渡って行った。火野葦平の『土と兵隊』『麦と兵隊』『花と兵隊』が盛んに読まれ、歌

われた。その頃、昭和生まれの児童は、紀元二千六百年の式典に参加し旗や提灯をふりながら、大日本帝国に生まれた事を感謝していた。

昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争が勃発するや、最初は華々しい戦果に興奮していたが、僅か二年にして悲報ばかりが伝わって来た。

昭和十八年になると、二月にガダルカナル撤退、アッツ玉砕。九月には動物園のライオンを毒殺、象は餓死させられた。十月二十一日には東京・明治神宮外苑で百七校・六万五千人の学徒出陣壮行会が行われる。彼らの多くは、特別操縦見習士官として、僅かの訓練により特攻機に機乗して南方の海に消えることになる。そんな状態の時に中学校、女学校、商業学校、工業学校に通う生徒は、学徒勤労・女子挺身勤労令により学業中止し軍需工場等で生産に携わることになる。

戦況はと言えば、昭和十七年、海軍に十四歳以上特別志願兵制度が発足、成績優秀ならば海軍兵学校にも行けるとされ、一期採用人員三千二百人に対し応募者

三万人とある。その兵は「大和」を含む特攻船団に乗船、昭和十八年四月、沖繩嘉手納基地に到着以前に日本海軍は壊滅していたのである。

昭和十八年十二月十四日、「現役下士官補充及服役臨時特例」により、翌十五日、市町村官公署において一斉に特別幹部候補生の募集が、本土はおろか、台湾・朝鮮・満州でも行われ始めた。募集の期間は昭和十九年一月三十一日までとある。兵種は航空兵・船舶兵で、年齢は大正十三年四月より昭和四年四月一日までに出生の者とする。また十二月二十四日には、明年より徴兵適齢一年引き下げ、満十九歳で壮丁検査を実施の勅令が出る。

我々は昭和三年・四年生まれの中学三年生であった。当時は共学はなく、男子校の場合は各中・商・工学校に軍管区司令部から配属将校が各校に派遣されており、軍事教練の査閲があり、その下される成績の発表如何は校長の首を飛ばすくらいの権限を持っていた。その配属将校が三年・四年・五年の生徒を講堂に集めて「国の存亡をお前達はどう思う」と聞かれ、そ

して陸軍特別幹部候補生の募集要領の発表が行われた。男子はいずれは軍に行かねばならぬことだけは決まっていた。先行き陸士・海兵を志願するつもりだったが、とにかく願書を親に内緒で提出し軍から通知が来る。

二月五日、レントゲン検査。翌日身体検査。その結果、甲種合格を言い渡される。親は、身長・体重等から合格にはならぬと思っていたらしい。三月には赤紙が参り「陸軍航空通信学校・加古川教育隊に入校し所定の検査を受けよ」の命令書が届いた。

四月十日には陸軍一等兵の階級章をつけ、菊のご紋章がついた九九式短小銃を拝領した。入校式では航空士官学校卒の将校より「お前らの命はもらった」と、これが初めに受けた言葉である。次に人事担当の准尉より「現免になって帰れると思ったたら大間違いだ」。大変な所に入ったことを悔いたが後の祭りだった。

特幹志願者の分科は、操縦・整備・通信の科目別はあるが、それぞれの学校に入校した者と部隊に入隊した者があつたらしい。さらには応募者数多く、数度に

分けて入校隊させたことが戦後にわかった。私共は、十分教育をされた方だと思われる。

昼は軍事訓練、夜は通信についての、通信学理からモールの訓練が始まった。こんなにも軍隊とは勉強する所かと思うほど詰め込まれた。しかし若いため電鍵を打つのと受信はひけをとらなかった。郵政学校等が廃校になり既習者として入校した同期生以外では、我々十五歳、十六歳の年少組が成績は抜群であった。

十月頃、故郷に外泊二泊が許された。親に生き別れして来いという意味である。故郷で幼なじみの隣人の女性に「親をよろしく」と言うのがやっとだった。後からその子の母親が飛んで来て私の肩を叩いて「銃後は心配するな」と励ましてくれた。その年の十二月末に卒業した。

昭和十九年十二月末、第一陣が台湾に転属した。

翌年一月十九日、米軍B17爆撃機百機が明石にある川崎航空機の工場を爆撃、各中隊より数人、明石工場に派遣、援護活動をする。戦争が近くまで来ていることを実感した。

三月になると転属の命令が出た。満十六歳の門出である。加古川駅より行く先不明で客車に乗車する。下関に着く前にどこで乗車したのか満蒙開拓軍の少年と会話した。「何処へ行くのか」「満州であります」「そうか頑張れよ」と励ますと、「兵隊さんも」と言われた。彼らの歳は私達より一つか二つぐらい下であった。

九州に来て部下拝領のニュースが流れ、同期の年長者から「俺達の名折れにならぬよう」とはっぱを掛けられた。菊池にて十九歳の召集の新兵を受領。各班に十名ぐらいだ。それから行軍し熊本・龍田で小学校を占拠し駐留することになった。部隊名は、第六航空軍・第七十一対空無線隊。総数は二百三十二人であるが、少飛十五期・特幹一期四十数人のうち、選抜の十人ぐらいが班長となる。特幹は加古川で対空通信の教育を受けた第五・六中隊の仲間である。ぎこちないが、私も第六班の班長となった。「班長殿、食事準備終わりました」「よし食事始め」である。

沖縄・爆撃隊・六十戦隊の送受信を受け持つことに

なり、私もその一人になった。

フィリピンから、沖縄戦のために展開した爆撃隊の送受信が担当であった。ただ不思議なことに、九州における我々の航空部隊は、連合艦隊司令長官が我々の最高司令官であった。

総攻撃といっても、四、五機で夜間飛び立っていた。制空権は殆ど米軍にあり、我々の攻撃の翌日は、必ずと言っていいほど大刀洗に米軍が爆撃に来たようだ。

熊本・健軍の秘密飛行場は終戦まで見つからず、米軍を悩ましたことと思う。森の都、熊本で一本しか滑走路がなく、すぐに森の中に隠したからだ。

昭和二十年の四月一日に米軍は沖縄に上陸した。五月になってから、何か幹部の動きが慌ただしい。戦争の活路を開くための陸海航空部隊による「天一号作戦」であった。攻撃誘導の送信回線の中では、米軍の妨害電波はものすごかった。

五月二十三日に健軍の飛行場を十二機が空挺隊を乗せ離陸した。沖縄の北・中飛行場に胴体着陸を強行す

るためである。当初は、陸海の航空機による特攻作戦と呼びし攻撃する予定であった。離陸後、第七十一対空通信所では、後ろで渥美六十戦隊長が着地の報道をまだかまだかの催促であった。花本正通信手「感あり」私も続いて「感あり」ただ妨害電波が著しく、機種の暗号名がはっきりしなかった。実際には、二機か三機だった事が米軍の資料で戦後確認されている。

六月二十三日に軍司令が自決し沖縄戦は終結した。それから何度か沖縄に向かう爆撃機の離陸に送受信の役割を果たしたが、天一号作戦以後は我が国が勝てる戦況を信じられなかった。

しかるに機上通信手募集が通達された。その頃、東京より、幼なじみが空襲の怪我で破傷風になり、半年前に死んだとの知らせが届いた。「よし、俺も志願しよう……」もうやけくそであった。手紙をつかんで河原で半日近く泣いていた。死ぬべき私が生きている。死はやはり怖かった、しかし消えた。

八月になり、広島と長崎に新型爆弾が落とされ、仁科博士が軍命令で調査の結果、原子爆弾だと断定した

ニュースが入っていた。八月十日基地の空で逆三角の雲を見、あれは何だと語ったことを思い出す。超高空を気流に乗り、熊本方向に流れていた。八月九日長崎の原爆の雲だった。

八月に入ってから、通信機の周波数函を交換し、米軍の短波による音楽放送を横穴壕で聞いていた。日本語デマ放送が始まると切っていた。記憶によると大山郁夫教授と聞こえたような気がする。

数日後、終戦の詔勅。お決まりのように八月末復員。「母さんだいま、武運つたなく帰りました」挙手の礼の最後であった。その頃、にわか民主主義者が「だから戦争反対だった」。町のそんな声に「冗談じゃない、征け征けと煽り、誰のために志願したのだ。亡くなった人になぜ感謝とお詫びの心を持たないのか」。誰もいない焼け跡の青空に、暗らしようもない相手に馬鹿野郎……と絶叫したことを覚えている。

追記

航空部隊に転属した他の特幹生の記録

航空については操縦志願者を除き入校隊が異なる

も、通信・整備志願者のおおよその人数はつかんだが、転属先については殆どの航空部隊に参加していた。

明野で昭和十九年末に編成した二百戦隊に特幹生が九十数人転属し戦死。硫黄島・沖繩でも多数戦死。しかも特攻機出撃後は歩兵斬り込み隊員となって戦死。その他、シベリア抑留で病死。それらの仲間は十六歳、十七歳、十八歳で死線をさまよって来られた者が余りに多い。職業軍人・召集による犠牲者は戦争であれば止むなしとすれど、この召集年齢未満の青少年達を死に追いやった事を、どうしてこの国の記録に残さないのか、あまりにも亡くなった同僚が気の毒でならない。今の青少年に戦争の惨禍を繰り返してならぬと伝え、悲劇を後世に残して欲しいと思う次第である。